

(別紙2)

ナベヅル、マナヅルについて

冬季に日本の水田地帯に飛来する絶滅の恐れのある鳥類で、かつては全国に飛来していましたが、乱獲や圃場整備等による湿田の減少等によって、現在は国内外でも非常に限られた地域にしか飛来していません。鹿児島県出水地方では長年継続した保護施策により、ナベヅルは約1万3千羽、マナヅルは約3千羽が越冬するようになりましたが、世界のナベヅルの約9割、マナヅルの約5割が当地に集中していることにより、重篤な感染症が発生した場合に絶滅の恐れが高いことなどから、一極集中は大きな問題となっています。

出水地方以外に複数箇所の越冬地を確保することが重要との観点から、環境省や関係自治体、自然保護団体等が協力して新たな越冬地形成にむけて努力しているところです。しかしながら、非常に警戒心が強いため、飛来があっても銃猟による銃声や、落ち鮎漁等での河川への夜間の立入り、カメラマンや見物客の過度の接近等により定着が阻害され、ほとんど越冬には至っていないのが現状です。特に、飛来して間もない期間は警戒心が強くなります。一方で、ツル類は寿命が長く、越冬地では定住性をもつため、越冬できた場所は学習し、翌年以降も渡来する可能性が強いため、越冬実績を重ねることで、安定した越冬地が形成されます。

(1) ナベヅル (*Grus monacha*)

ロシア南東部、中国東北部の高原の湿地帯で繁殖する。つがいごとになわばりをもち、最大2個の卵を産む。秋になると、その年に生まれた幼鳥と共に西日本、韓国南部の水田地帯に渡り、越冬する。日本には、10月～3月に渡来する。

越冬地では、主に穀類の落ち穂や植物の種子、根茎、昆虫、小型の水生物を食べる。開けた空間を好むので、干拓地のように広い水田地帯に生息するが、周南市八代のような盆地の水田も利用する。

基本的に冬も家族単位でなわばりをもって行動する。環境条件によって数十羽の群れを形成する場合もある。夜間は、水深10～20センチ程度の河川の中州や干潟の干出部、湿地、ため池等でねぐらをとる。

- ・全長 約100 cm
 - ・世界の推定個体数 約16,000羽
 - ・IUCN レッドリスト 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
 - ・環境省レッドリスト 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
 - ・日ロ渡り鳥条約
 - ・日中渡り鳥協定
 - ・ワシントン条約附属書Ⅰ
 - ・種の保存法 国際希少野生動植物種
 - ・文化財保護法 特別天然記念物
- 「鹿児島県のツルおよびその渡来地」
「八代のツルおよびその渡来地」



ナベヅル(左：幼鳥 右：成鳥)

(2) マナヅル (*Grus vipio*)

ロシア、中国、モンゴルの国境を流れるアムール川流域やウスリー川流域の湿原で繁殖する。越冬地は、西日本、朝鮮半島の非武装地帯、中国南部の湖沼。日本には、11月～2月に渡来する。開けた環境を好むため、干拓地のように広い水田地帯に飛来する。冬の生態はナベヅルと同様。両種がゆるやかな群れを作り、一緒に行動することがある。ナベヅルより湿潤な環境を好むとされている。

- ・全長 約 127 cm
 - ・世界の推定個体数 約 6,000 羽
 - ・IUCN レッドリスト 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
 - ・環境省レッドリスト 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
 - ・日ロ渡り鳥条約
 - ・日中渡り鳥協定
 - ・ワシントン条約附属書 I
 - ・種の保存法 国際希少野生動植物種
 - ・文化財保護法 特別天然記念物
- 「鹿児島県のツルおよびその渡来地」



マナヅル(左：成鳥 右：幼鳥)